中高生とともに差別と闘う

『救われたのは』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

前号に続く、それぞれの卒業メッセージです。

＊

カレンの卒業

「教室で勉強したことは忘れてしまったけど、人権学習とか、放課後の学活とか、私がつらい時にみんなにかけてもらった言葉とかは、全部覚えています。いつも私は何もできなかったけど、みんなに支えてもらって、今こうやって卒業式を迎えてるなって思えました。

先生方にもいっぱい迷惑かけたし、いろいろお世話になりました。あと、父さんとか母さんにもいっぱい迷惑かけたし、いつも支えてくれた友達が大好きです。ありがとうございました。」

＊

マリアの卒業

「私は私であって、この世界に一人しかいません。みんなもみんなでしかないし、一人しかいません。だから差別も生まれるのだと思います。

たくさん三年間で学びました。学校の勉強なんかよりもずっと、人権で学んだものが一〇〇倍くらいあります。人の大切さを知ることができました。差別は許せません。私も差別をなくしていこうと思います。

今ここにいる一人一人のみなさんに出会えたのも、この地球という小さい星ですが、ここに生まれ、私がこの学校にいたからです。これからも差別をなくしていけるような強い人間になりたいです。」

＊

ミナコの卒業

「いっぱい言いたいことがあります。

まず部活から。三年間ずっとバスケットボールをしてきて、キャプテンを任されて、すごく頼りないキャプテンだったけど、二年生も一年生もちゃんとついてきてくれて、みんなで一緒に練習して頑張ってこられて、とてもとても嬉しいです。本当にありがとうございました。

みんなには…、小学校の時とかは、こんな仲間になるとは思ってなくて、先生方がいたから、みんな変わっていけて、私もこの三年間で随分変わったと思います。本当にここで、この学校で学べて、とても良かったなって、本当に心から思います。

たくさんの人たちに支えられて、とても良かったと思います。本当にありがとうございました。」

＊

代表生徒一人の答辞ではなかったからこそ、参列する様々な人々に直接語りかけることができました。歌あり、涙あり、笑いあり、それぞれの味わいが滲み出る、本当に素敵な卒業式でした。

救われたのは

卒業式の日の夕方、メールが届きました。差出人はミナコのお母さん。ミナコの成長を見守っていただきたいとの思いで、連絡をとり合っていたのです。

メールのタイトルは、「ありがとうございます」。

＊

「今頃は、呼名にすがすがしい声で応えているでしょうか。今日でいよいよ中学も卒業となりました。ミナコが無事この日を迎えられたのも、先生方のおかげです。ありがとうございます。

『〇〇高校に決めた』と連絡があってからは、ミナコにメールもできませんでした。不甲斐ない私は、合格の知らせがくることをを祈るだけでした。

夕べ、ママ友の一人が卒業アルバムを届けてくれました。いまだにいろんな方々にお世話になっています。アルバムの中のミナコは笑顔でした。先生が送ってくださったビデオの中にも、もがきながら成長するミナコの姿がありました。成長してないのは、私です。先生方にも、伝えても伝えきれない感謝の気持ちをどうすれば伝えられるのか。何度もメールを書きかけては消して…。

自分の心の中の醜さを見られたくなかったのです。人を責めることで自分を慰めている。私は、まだそんな人間です。こんな母親をミナコだって嫌に思うはず。

またこのメールも送信せずに消去してしまいそうです。だから、読み返さずに送ってしまいます。

先生、本当にありがとう。ミナコの力になってくれて。私の力になってくれて。心から感謝しています。」

＊

お母さんの感謝の言葉をそのまま受け取れるだけのことをしてきたか、そう自問しても、否と思わずにはいられません。もしミナコの救いになったとしたならば、それは級友であり、学年の仲間たちです。私たち教師は、そのきっかけづくりをしたに過ぎません。それに、私たちだって、この子らに救われたのですから。人としてどう生きるのか、そのことを痛切に教えられたのは、間違いなく私たち教師なのですから。

おわりに

この子らとの別れから約十五年。百年も二百年も前の話ならまだしも、まだこの事実から十五年しか経っていません。十五年が経ち、部落差別はどうなっているのか。この子らの抱えた人生や傷は、癒えているのか。結婚がすべてではありませんが、大人になったこの子らは、何事もなく幸せに暮らせているのか。今も気がかりでなりません。

この子らの人生が暗闇だとは言いませんが、それでもこの三年間の語り合いがなければ、それぞれの世界を閉じこめたまま、人生を送っていたかもしれません。そうではなく、思いを共有できることの可能性、共有できる仲間の存在を感じてくれていれば、それが生きていく礎となるのでないかと思います。

この子らのストーリーはまだ終わっていません。今もなお続いています。だからこそこの子らへの愛おしさを抱きしめたまま、これからも私は生きていこうと思います。

イラスト　中島　亜唯